【研究ノート】

ヨーロッパにおける合理的選択社会学，説明社会学，分析社会学の最近の研究動向（その 3）

久　慈　利　武

1.　執筆動機

教養学部論集 180, 181 号 に掲載した「ヨーロッパにおける説明社会学と分析社会学の最近の研究動向」を読んだ読者は，題に説明社会学と分析社会学が出ているのに合理的選択社会学が出ていない，論旨から推察すると説明社会学と分析社会学はともに合理的選択社会学の分派のようだと感じとってもらえたようだ。しかし説明社会学と分析社会学はどこで袂を分かつのか，両者はどんな関係にあるのか自明の前提として論が進められているきらいがあった。行為理論としての合理的選択理論と研究プログラムとしての合理的選択社会学の区別もはっきりしなかったきらいがあった。

前稿執筆時には存在に気づいていなかった分析社会学の紹介論文（打越・前嶋 2015），分析社会学と合理的選択社会学の関連を追及した意欲作（尾藤 2019）に接して，連作の第 3 弾を執筆する意欲が湧いた。この連作は日本の数理社会学の合理的選択研究者が英語論文のみを読み，ドイツ語圏，ヨーロッパの合理的選択研究がどう展開されているか正確な俯瞰を持てないでいることへのもどかしさに発している。ドイツ語圏，ヨーロッパの合理的選択研究者は確かに英文で論文を発表し，国際社会学会，アメリカ社会学会両学会の合理的選択部会で英文で口頭発表している。しかしその部会に出席し彼らと交流している日本研究者でも，英文で発表された雑誌論文を読むだけでは，所々欠けたパズル絵を眺めるようなものである。前稿でふれたオップ，リンデンベルク，クロネベルク，ディークマン，トマス・フォスは英文よりもドイツ語で発表する方が多いし，レイモン・ブードンに至っては新しい論文，著作はフランス語で発表し，のちに他者によって英語に翻訳されている。エサー，ミヒャエル・シュミット，アンドレア・マオラーはほとんどドイツ語で論文，著作を執筆していて，英文の発表は極めて例外的である。 例外はヴェルナー・ラオプで，ドイツ語論文が基本のハンドブックにまで英語で掲載している。比較的英文で発表することの多い，オップ，リンデンベルク，クロネベルク，ディークマン，トマス・フォス，そしてラオプまでも，博士論文，ハビリタツィオン，初期，中期の成果（雑誌掲載論文，編著寄稿論文）を読もうとすればド

イツ語読解力が要求される。

2.　日本の合理的選択理論研究の状況

日本社会学会発行，英文機関誌 *International Journal of Japanese Sociology* 2013 年第 22 号に，佐藤嘉倫さんが Mathematical Sociology in Japan : Its Powerful Developement and a Problem を掲載し，日本の数理社会学会の歴史とその機関誌『理論と方法』のなかから，数理社会学の成果を学者のピックアップに遺漏のないように配慮して紹介している（Sato 2013）。また 2018 年に Sage 出版から小林盾，筒井淳也，金井雅之共編で *Contemporary Japanese Sociology* 3.vols が刊行され，金井雅之編集の第二部 Mathematical and Rational Choice Sociology に 20 本の日本の研究者の英文で発表された既発表論文が精選されて掲載されている。しかしこの第二部の編集をした金井さんの序論は Mathematical Sociology in Japan と題されて，表 1 で，日本，合衆国，ヨーロッパの数理社会学，合理的選択の学会発足と雑誌の刊行開始年次，表 2 で，日米合同数理社会学会議の第 1 回（2000）から第 6 回（2016）迄の開催地，期間，オルガナイザー，表 3 で，日本の数理社会学会の機関誌『理論と方法』特集題一覧が掲載されている。さらに掲載されている論文を三期（1986-1992, 1993-2005, 2007-2017）にわけ，特徴と傾向に触れている。ただ生憎なことに合理的選択研究に絞ってスポットが当てられていない。上記 2 つの成果は待望されていたものだけに，海外の数理社会学研究者に，日本の学者の紹介，動向の伝達に大いに貢献することであろう。

前記の佐藤嘉倫さんは，日本人で初の国際社会学会合理的選択部会（RC45）の会長を歴任し（1990-1994），海外で最も知名度の高い日本の合理的選択研究者である。日米数理社会学合同会議の日本側発起人のひとりであり，すぐ続いて言及する日欧合理的選択合同会議の（三隅一人さんとともに）日本側代表のひとりである。彼は国際社会学会が編纂した社会学エンサイクロペディア Sociopedia（2010）に Rational Choice Theor（10p）の項目を執筆している。理論的アプローチ，経験的証明，合理的選択社会学に対する批判 3 集団，今後追求が有望視される 3 方向，さらに付録として上記の各パートの更なる推薦文献を解説付きで紹介している。私は他にも合理的選択社会学の研究動向論文を目にしてきたが，それらに比べて遜色のない俯瞰とバランスのとれた動向紹介だと思っている。ここまでは，海外の研究者に向けての日本の研究者の研究動向をようやく発信し始めた機運を紹介した。

つぎに日本の若手の数理社会学研究者に，あまり知られていない日欧の合理的選択研究者の交流の歴史を紹介したいと思う。皆さんは日欧の合理的選択研究者の交流はいつから始まったと思いますか。正解は 2001 年，10 月 18-20 日　ライプチヒ大学で開催の合理的選択

とフォーマライゼーション欧日会議である。日本側参加者の費用は三隅一人さんが代表者の科学研究費で賄われている。ほぼ隔年で 4 回開催されている*。この合同会議については，若手研究者は学会，科研研究会で年配の研究者から会話で耳にしている者もいるだろうが，論文等活字になったものは皆無である。当事者の口から直接語ることにしよう。

* 参考資料を載せておく。

2001 年，10 月 18-20 日　ライプチヒ大学　オルガナイザー　Opp，Voss，Kropp
European Japanese Conference on Rational Choice and Formalization
日本側参加者　小林盾，佐藤嘉倫，太郎丸博，三隅一人，七条達弘，中野康人，私
ヨーロッパ側　ライプチヒ大学側　Karl-Dieter Opp，Thomas Voss，Peter Kropp，Bernard Prosch
スイス・ベルン大学　Martin Abraham，Axel Franzen
その他のドイツ　Roger Berger（München），

2003 年，10 月 3-5 日　福岡　シー・ホーク・ホテル　オルガナイザー　三隅一人
International Conference on Rational Choice and Social Institutions
日本側参加者　小林盾，佐藤嘉倫，太郎丸博，三隅一人，籠谷和弘，長谷川計二，大浦博邦，七条達弘，木村邦博，中野康人，渡邊勉，平松闊，豊島真一郎，友知正樹，松田光二，小林淳一，田中マキ子，磯道義則，私
ヨーロッパ側　グローニンゲン大学　Rafael Wittek，Siegwart Lindenberg，Andreas Flache
ライプチヒ大学　Karl-Dieter Opp
ミュンヘン大学　Rolf Ziegler
マンハイム大学　Volker Stocke
ロンドン大学　Peter Abell
シカゴ大学　山口一男

2005 年，3 月 9-11 日　グローニンゲン大学　オルガナイザー　Rafael Wittek
International Conference on Rational Choice and Social Institutions
日本側参加者　小林盾，佐藤嘉倫，三隅一人，木村邦博，篠木幹子，私
ヨーロッパ側　グローニンゲン大学　Rafael Wittek，Siegwart Lindenberg，Andreas Flache
Peter Mühlau
蘭　アインドーヘン工科大学　Chris Snijders
独　ライプチヒ大学　Karl-Dieter Opp

2007 年，9 月 6-8 日　スイス　チューリッヒ連邦工科大学 ETH　オルガナイザー　Anderas Diekmann
International Conference on Rational Choice and Social Institutions
日本側参加者　小林盾，佐藤嘉倫，三隅一人，盛山和夫，渋谷和彦，藤山英樹，武藤正義，木村邦博，篠木幹子
ヨーロッパ側　スイス　チューリッヒ ETH　Anderas Diekmann，Wojtek Przepiorka，Ben Jann
Hanno Scholtz，Patrick Groeber
ベルン　Rolf Becker，Regula Imhof
独　ライプチヒ　Karl-Dieter Opp，Roger Berger，Heik Rauhut，
ビューレフェルト　Stefanie Eifer，Susann Kunadt，
マンハイム　Clemens Kroneberg，Volker Stocke
ドレスデン　Gugio Mehlkop

フライブルク　Georg Mueller
蘭　ユトレヒト　Rens Corten，Vincent Buskens，Manuela Vieth，Jeroen Weesie
Rania Valeeva
アインドーヘン　Chris Snijders
仏　パリ　Shyama V.Raleeva（INRA），Marie-Laura Cabon-Dhersin（CNRS）
デンマーク　コペンハーゲン　Anders Holm，Mads Meier Jaeger
米　Guillermina Jasso（ニューヨーク）
Jason Fong（UCLA）

わたしは昭和が終わる前年1988年9月から11月にかけて，文部省（当時）在外研究派遣で，オランダ　ユトレヒト大学ラインハルド･ウィプラーのもとに1月，次いで西ドイツ（当時）ハンブルグ大学カール・データー・オップ，ミュンヘン大学トマス・フォス，エアランゲン・ニュルンベルク大学ヴェルナー・ラオプ，さらにパリ・ソルボンヌ大学レイモン・ブードンのもとを訪れた*。さらに1990年7月スペイン・マドリッド大学で開催された第12回国際社会学会に参加して，合理的選択部会で彼等と再会した**（余談だが，シンポジウムの席でフロア席にいたジェームズ・コールマンが報告者に対して質問するのを見かけている）。

＊拙稿「オランダ・西ドイツ説明社会学研究者を訪ねて」『理論と方法』4（2）：101-108に掲載。
** この国際社会学会探訪は数理社会学会ニューズレター5（3）1990年9月に掲載。

1998年9月にベルリン陥落後，ライプチヒ市民のニコライ教会月曜礼拝の装いをとった東ドイツ崩落の市民運動参加者にフォロー・リサーチをするために，旧東ドイツのライプチヒ大学に移籍したオップ教授のもとを訪れた。その翌週一週間オランダ・フローニンゲン大学のリンデンベルク教授を訪れた。オップ教授，リンデンベルク教授との会話の中で，日本の合理的選択研究者との交流が話題に上った。2001年にライプチヒ大学で第一回の合同会議を持った。これにはオランダの研究者は参加していない（余談であるが9.11のアメリカ貿易センターテロの直後で，空港の出入国，ライプチヒ大学の建物構内の出入りが物々しい警備であったのを記憶している）。オップの2002年誕生日退職の1年前であった。中心的オルガナイザーはトマス・フォスであった。

2003年日本で開催ということで科研の研究代表者でマネージメント能力に秀でている三隅一人さんがオルガナイザーとなり，福岡のシーホーク・スタジアムに隣接するホテルで合同会議が開催された。海外からの参加者には，ミュンヘン大学を退職したばかりのロルフ・ジーグラー，ロンドン大学のエイベル，シカゴ大学の山口一男が混じっていた。

合理的選択と社会制度会議の名称の第一回目である。その後2005, 2007年にオランダ・グ

ローニンゲン大学，スイス・チューリッヒ連邦工科大学（RTH）と 2 回開催されている。

ETH で開かれた合同会議に新たに加わったメンバーたちは，2010 年（スウェーデン･ヨーテボリ），2014 年（日本・横浜）国際社会学会 RC45 に参加発表するようになり，合理的選択と社会制度会議は発展的に解消した（余談であるが，2011 年 9 月に木村邦博さんがオルガナイザーで仙台で開催の予定であったが，3.11 東日本大震災で開催が返上になった）。2014 年横浜で開催された国際社会学会日本大会の RC 部会はポスター・セッションを除く日本側口頭発表者は 15 人を数える盛会であった。小林盾さんがオルガナイザーを務める分析社会学国際ネットワーク大会がオリンピック前の 2020 年 5 月，東京で開催が予定されている。2014 年，2020 年の合理的選択関係の国際大会が開催されるまでになった今日の状況を思うと，感慨一入である。私は種を撒いただけで，水をやり，肥料を撒いて苗を育てた三隅，佐藤両君の貢献が大なことは言うまでもない。

3.　ヨーロッパ研究者の次世代群像

東北学院大学ホームページ掲載の電子版，拙稿『動向（正，続）』と『ドイツ語圏代表的 RC 社会学者」3 編を添付ファイルで，オップ，ラオプ，フォスに送ったところ，日本の合理的選択理論に関心のある研究者に自分の仕事を紹介してくれたことに感謝する返事をもらった。

ラオプは，オランダ　ユトレヒト大学の HP に最近の自分の雑誌掲載論文，著書，ハンドブック寄稿論文を掲載し自由に読めるようにしている。そのなかに 2012-2017 年就任した，大学の社会・行動科学科長退任の講演記録が公開されている。Rational Model と題して Rational choice models of trust and cooperation in social dilemma　Part I : Theory, Part II : Empirical research on embededness effects 90 頁。彼はグローニンゲン大学のリンデンベルクとともに，オランダ連合大学院 ICS（Interuniversity Center for Social Science Theory and Methodology）を主導する。オクスフォード大学ヌフィールド校での 45 分の講演から発展し，ブックレットとして書き下ろしたものである（2017 年 1 月）。彼の専門論文はほとんどが共同執筆であり，ゲーム理論を駆使して自分の養成したユトレヒト大学の院生，同僚と著した論文を材料に理論枠組み，モデルの発展と検証を回顧している。彼はドイツ生まれで，ボッフム大学でハルトムート･エサーに師事し，大学院はオランダのユトレヒト大学でラインハード・ヴィプラーのもとで，博士論文を書いている。『合理的行為者と制度による規制と相互依存 : 構造個人主義的基礎への説明社会学的探求（1984）』ゲーム理論を使ったフォーマル

モデルからブードンの「不平等と教育機会（IEO モデル）」「行為者の社会的機会と相対的剥奪（ISO モデル）」の限界の指摘と展開をはかったものである。彼はボッフム大学で同期であったトマス・フォスと共著で『個人行為と社会的帰結（1981）』を著している。フレームワークの章でリンデンベルクの説明社会学を解説，それでもってフンメル & オップの『社会学の心理学への還元（1971）』から説明社会学に改宗したオップの『個人主義社会科学（1979）』を批判している。分析編ではコールマン『集合決定』, オルソン『集合行為の論理』にフォーマルモデル応用を試みている。

前稿で，ラオプとの共著論文，ディークマンとの共著論文，ノーマン・ブラウンとの共同著作『アクチュアリティ・シリーズ　ジェームズ・コールマン』で触れた，トマス・フォスは，ミュンヘン大学で教授資格を認定されてからなかなか就職口がなかったが，東ドイツ崩壊後ライプチヒ大学に移ったオップの推挙で，ライプチヒ大学に就任している。フォスの博士論文『合理的行為者と社会制度（1985）』は, 海野・盛山編著『秩序問題と社会的ジレンマ』（ハーベスト社）所収拙稿で紹介している*。ラオプと共訳でアクセルロッドの『協力の進化』を出版している。コールマンの社会規範の発生，執行論，信頼論に対してパラメトリックな合理性としての限界を指摘し, ストラテジックな合理性論から展開をはかり, ラオプ, ディークマンと共同研究を進めている。ジーグラー，オップの祝賀論文集の編集をディークマンと共同で行っている。そのつながりで，スイスチューリッヒの連邦工科大学を退職したディークマン** はライプチヒ大学の客員教授である。

＊理論と方法（1991）6（1）：1-20「秩序問題への個人主義アプローチの可能性」と同一内容である。
** ディークマンはドイツ社会学会機関誌社会学年報（2014）43（1）87-89 に連邦工科大学でハヴィリタツィオンの指導生であったノーマン・ブラウンの追悼文を寄せている。

アンドレアス・ディークマンは 1951 年生まれで, 大学はハンブルグ大学でオップに師事し, 大学院はミュンヘン大学でジーグラーに師事している。彼の著したゲーム理論の標準教科書は版を重ねている。日本の研究者では篠木幹子がディークマンの環境行動の合理的選択論文を手がかりに，日本の事例で研究を進めている。彼の代表的論文は，Darley/Latane（1968）の責任の分散をヒントに展開したボランティアのジレンマ（Diekmann 1985），ブードンの教育機会と相対的剥奪を展開したモデル（Berger/Diekmann 1984），Dasgupta（1988）の信頼ゲームの信頼性のシグナル理論（取り締まる法律がなく取引が一回きりで繰り返されることのない状況で，しかも相手の信頼性に関する情報がほとんどない状況で，登場する信頼関係のシグナルを通じて多様な協力解とそれを確保するためのダイヤド，ネットワークへの埋め込み）による市場における信頼問題の解決の研究（Raub/Busken 2006），ケインズの美人コンテストになぞらえた株の投資家の心理研究を事例に，厳密な合理性論よりも，制限され

た合理性論の優位を説いている（Diekmann 2006）。これらの研究の総まとめを発表している（Diekmann 2014）。またディークマンはヘドストロームの『社会的なものの解剖（2005）』のドイツ語版の書評合評会で，DBO 理論は相互行為の結果を分析すると謳いながら，戦略的相互行為の視点，ゲーム理論の視点が消し去れていると批判的な見方を示している（Diekmann 2010）。ディークマンの自研究の総集編論文も分析社会学の DBO 理論批判もドイツ語で著されているため，日本ではほとんど知られていない。ディークマン（1951 年生まれ），ラオプ（1953 年生まれ），フォス（1955 年生まれ），ヘドストローム（1950 年生まれ）が，ブードン（1936 年生まれ）オップ（1937 年生まれ）エルスター（1940 年生まれ），リンデンベルク（1941 年生まれ），エサー（1943 年生まれ），シュミット（1943 年生まれ）に次ぐ世代で，さらにそのあとがマオラー（1967 年生まれ），クロネベルク（1975 年生まれ）である。

4.　合理的選択の広義版，狭義版の分類を理解するために

オップの合理的選択の広義版，狭義版の分類はブードン批判，分析社会学批判，自著の『政治プロテストと社会運動（2009）』で有名であるが，分類のマニフェストというべき論文は *Journal of Theoretical Politics* に掲載された Contending conceptions of the theory of rational action（1999）である。そこでは，政治学者 Ferejohn，社会学者 Hechter にならって，thin version（empty version）と thick version に分け，さらに後者を narrow version と wide version に分けている。

narrow version	wide version
利己的選好だけ説明変数	すべての種類の選好が説明変数
有形の制約だけが説明変数	すべての種類の制約が説明変数
主体は情報完備	主体は情報完備のこともあればそうでないこともあり，この仮定は必ずしも必要としない
客観的制約だけが説明変数	そのほかに知覚された制約も説明変数
制約だけが行動を説明する	制約と選好が行動を説明する

empty version はどんなコスト，ベネフィットが念頭に置かれているか特定しないで一般的に言及する。新古典派経済学と期待効用理論やゲーム理論がそれである。

オップの分類は，顕示的選好理論，期待効用理論，ゲーム理論は empty version，Green & Shapro によって批判されている政治学の合理的選択理論（ダウンズ，オルソン）は narrow version，自分の政治行動，社会運動の合理的選択理論は wide version といっているように見

受ける。政治学の合理的選択理論家がwide versionを拒絶する理由に，

1. 選好と信念は測定できない。
2. トートロジー同義反復である。
3. アドホックで恣意的である。
4. 経験的内容がないので反証ができない。
5. 些末で知っているもの以外の内容がない。
6. 予測に使えない。
7. 行動の説明にnarrow versionだけで十分。

上記の批判に逐一反論している。

オップは対象によってwide versionよりnarrow versionの方が有効，説得的な場合もあることを認め，使い分けを推奨したり，アドホックで恣意的である説明を避けるための行為者の選好，制約に関する聴き取り，インタビュー，調査票調査によるデータ収集による検証を推奨している。

オップは分析社会学に対して，ヘドストロームのマニフェスト（Hedstrom 2005）の書評を執筆したり，分析社会学者マンツォ，イリコスキーとの間で論争を繰り広げている。多くの社会学者がRCTを嫌っているので，それを拒絶するASは歓迎される。大半の社会学者が中範囲の理論を採用しているので，門戸開放を推し進めるものとしてASは歓迎される。ASは，ヘンペル-オッペンハイムスキームの演繹的法則定立的説明が社会科学では不可能という意を受けて，それに代わるものとしてメカニズム的説明を提唱している。ここまでは問題ない。そのあとが問題だ。オップは社会現象について演繹的法則定立的説明が可能だから，メカニズム的説明は不用と主張するのではなく，ASのヘンペル-オッペンハイムスキーム理解をめぐって論争している。論争のすれ違いである。また論争者のひとりマンツォは新種の新古典派理論では，オップの広義の合理的選択理論の機能を遂行できると反論するところから，選好の仮定の解釈をめぐる論争へと袋小路に陥る。マンツォ，イリコスキーの嗾け方が失敗である。広義のRCTとASのDBO理論は同義であるというオップの提出した解釈に対してまったく反応を見せていないことも失敗である。オップもおいおい，お前さん方の主張はヘドストロームのマニフェストと違うじゃないかと言えば良かったのだ。まったく不毛な論争であった。

5. リンデンベルク待望の単著なぜ出ない？

リンデンベルクはわたしがオップとともに最も敬愛する社会学者である。出会ったのも

オップと同時の私の最初のヨーロッパ訪問時である（1988）。2003 年に始まる日欧合理的選択と社会制度会議の毎回の出席者である。説明社会学グループの共通の分析スキームであるマクロ・ミクロ・マクロ・リンク図形（コールマン・ボート（バスタブ，逆台形）），架橋仮定（仮説），変換（集積）規則からなるグランド・スキームのデザイナーといえる。モデル構築の方法（抽象性縮減原理，十分な複雑性確保原理），（ホモ・エコノミックスとホモ・ソシオロジクスを合成した人間モデル）RREEMM 人間モデル，（自生的合理性論に対抗する）社会的合理性，目標フレーミング理論，（スティグラー & ベッカーの選好中心経済学を発展させた）社会的生産関数理論，プロスペクト理論に対抗する discrimination model（弁別モデル）も知られる*。自身の専門を最近は Cognitivist Sociology と呼称している。

*私は彼の理論体系，モデルを紹介，解説する論文を何本も書いている。代表的なものを挙げると，「架橋仮説と社会的生産関数のヒューリステックス —— リンデンバーグによる合理的選択理論の拡張」（人間情報学研究　第 8 巻 2003 年），「ドイツ語圏の合理的選択社会学者群像」（人間情報学研究 第 18 巻 2013 年），「フレーミングを考慮した合理的選択モデル —— プロスペクト理論と弁別モデルの比較」（岩本健良代表科研報告書『社会構造と社会過程のフォーマライゼーション』1997），リンデンバーグ「コールマンの制度設計の問題点 —— 社会的合理性の無視 ?」（「東北学院大学論集人間・言語・情報」136 号 2004）（仏フランス社会学レビュー 2003：44(2)　コールマン社会理論の基礎　特集掲載の翻訳）。

彼の方法論，モデル論を要領よく知るのに格好のものがある。リッツァー編『社会理論ハンドブック』ラッセルセージ出版社 2005 に D. Hekathorn 執筆で「リンデンバーグ」項目がある。執筆論文は 100 本を超える。その一覧とほとんどの論文は，グローニンゲン大学の公式サイトで彼のリサーチ欄をクリックすると閲覧入手できる。編著も共編で一桁数は存在する。それなのに単著の著書が一冊もないのである。2001 秋～2002 年夏ユトレヒト大学に研究フェローとして滞在した当時シカゴ大学博士候補（現成蹊大学教授）小林盾さんから，単著執筆中という情報を教わった。すぐにリンデンベルグにメールで確かめたところ，そうだとの返事であった。題も Theory of Social Rationality（Princeton 大学出版）。しかしそれから 18 年が経過しているのにいまだに刊行されていない。2013 年刊行のヴィテク他編の『ハンドブック合理的選択社会調査』の第 2 章に収録の彼の論文 Social rationality, self-regulation and well-being は執筆中著書の第 4 章の予定と書かれている。Social rationality が題に使用された始まりは J.H.Turner 編『社会学理論ハンドブック』収録 Social rationality versus rational egoism，同年雑誌に掲載された Social rationality as a unified model of man，である。

ずっと彼の論文を追いかけている私が感じるのは，彼の研究姿勢はオリジナルなスキーム，モデルの開発である。マンハイム大学でハンス・アルバートから科学方法論（モデル・プラ

トニズム批判）を学び，経済学の架空の仮定に基づく分析を少しでも実在に近づける，従来の経済学が制約から行為（そして社会的結果）を説明することに反旗を翻したベッカー＆ステグラーの選好から行為（そして社会的結果）を説明するビジョンを受け継ぎ彫琢する姿勢を貫いている。ウィリアムソン，フライ等取引理論経済学，新制度学派経済学の成果，企業の組織ガバナンス理論を批判吸収して少しずつ改良を加えている。主要なスキームであるgoal frame schemeも少しずつ改変されている。おそらく著書にする段階で，既発表の論文のスキームの改変をどう処理するか，各章に頻出する目標・フレーミング，社会的生産関数の反復をどう調整するか苦労しているからであろう。シュミットのように，既発表のものを再録して配置すれば5, 6冊はとっくに出版できたことであろう。

リンデンベルクの理論胃袋の中でうまく消化されていない箇所を指摘したい。自分の期待効用理論，bounded rationality理論とゲーム理論の戦略的合理性論の接合に無理がある。relational signalig理論を目標・フレーミング・スキームに組み込もうとして苦慮している。trustorとtrusteeのstrategic interactionに取り組むスキームで，ラオプに率いられるユトレヒト学派合理的選択理論との整合を意識したものである。しかしリンデンベルクの社会的合理性理論はサイモンのbounded rationality理論の分枝変種であり，perfect rationalityはparametric意思決定論のジャンルである。前述の2001年のターナー編著寄稿論文ではrational egoistとして新古典派の消費者理論，そして期待効用行為者理論，それらと社会的合理性行為者理論の三者を対比している。2000年と2015年の*International Encyclopedia of the Social & Behavioral Science*に掲載のAndrea Diekmannとの共同執筆項目Cooperation： sociological aspectsでは，ディークマン執筆のcooperation among rational egoistsで，囚人のジレンマ，その制度やネットワークへの埋め込みが紹介され，リンデンベルク執筆のcooperation among social rational actorsでは，社交選好social preference，学習，フレーミングに関する仮定が導入されることと，社交選好を弱めたり，強めたりする環境にどんなものがあるか，信用を支配するシグナルの進化，快楽，獲得，規範・倫理の各ゴールの状況定義への作用のトピックが紹介されている。

オップの広義版でも問題にしたが，広い版，狭い版は厚い版（弱い版）の下位類型でempty（から）版が薄い版（強い版）である。リンデンベルクの2001年では，新古典派の消費者理論，期待効用行為者理論，いずれもparametric意思決定論から捉えられ，社会的合理性はstrategic意思決定論として捉えられている面とparametric意思決定論で捉えられている面が共存している。ゲーム理論の選好，制約，結果が両者の間で食い違っている。参考までにヴィテック他編オランダ学派の合理的選択ハンドブックの合理性の表を転記する。

表　合理的選択ミクロな基礎の多様性

仮定	細い，強い合理性			厚い，弱い合理性
合理性	制限のない合理性	制限された合理性	手続き合理性	社会的合理性
選好（自分本位）	オポチュニズム	エゴイズム	結びつけられた効用	連帯
選好（物質性）	有形な資源	無形な資源	身体上の安寧	社交上の安寧
個人主義	原子的個人主義			構造的個人主義

この表もうまく理解できない。完全合理性（full rationality），制約のある合理性（bounded rationality），手続き合理性（procedural rationalty），社会的合理性（social rationality）と並べ，先なほど，thin, strong rationality, 後なほど thick, weak rationality と述べている。parametric rationality, strategic rationalty の区分とそれらはどう対応するのか全く不明である。オップでは thin（empty）rationality と thick rationality に区分され，後者はさらに narrow version と wide version に区分されるが，それとの対応整合がどうなっているのか説明がほしいところである。

文献一覧

打越文弥・前嶋直樹 2016 「Reviw Essay : P. Hedstrom Dissecting the Social（2005） 社会科学におけるメカニズム的説明の可能性」 書評ソシオロゴス 11 : 1-27.

尾藤央延 2019 「分析社会学と合理的選択の関係性についての批判的検討」 年報人間科学 40 : 53-72.

佐藤嘉倫 2013 “Mathematical Sociology in Japan : Its Powerful Developement and a Problem” *International Journal of Japanese Sociology* 22 : 16-31.

小林盾，筒井淳也，金井雅之（eds.）2018 *Contemporary Japanese Sociology* 3. vols. Sage Pub.

金井雅之 2018 “Mathematical Sociology in Japan” in *Contemporary Japanese Sociology* 2 : 111-116.

佐藤嘉倫 2010 “Rational Choice Theory” *Sociopedia*（社会学エンサイクロペディア）

Raub, W. 2017 *Rational Model.* Utrecht University Bookllet.

———. 1984 *Rationale Akteure, institutionelle Regelungen und Interdependenzen.* Frankfurt : Lang.

Raub, W./Th. Voss 1981 *Individuelles Handeln und gesellschaftliche Folgen.* Darmstadt : Luchterhand.

Axelrod, R. 1987 *Die Evolution der Kooperation.* übersetzt und mit einem Nachwort von W. Raub & Th. Voss. Munchen : Oldenbourg.

Voss, Th. 1985 *Rationale Akteure und soziale Institutionen.* München : Oldembourg.

———. 1998 “Vertrauen in modernen Gesellschaftten. Eine spieltheretische Analyse.” in R. Metze/ K. Müler/K.-D. Opp（hrsg.） *Der Transformationsprozesses.* Leipzig : Universitätsverlag. S.91-129.

———. 2001 “Game-theoretical perspectives on the emergence of social norms” in M. Hecter/ K-D. Opp（eds.） *Social Norms.* N.Y. : Rusell Sage. pp. 105-136.

Diekmann, A. 2014 “Die Anderen als sozialer Kontext. Zur Bedeutung strategischer Interaktion.” *Sonderheft der Kölner Zeitschrift. 54 Soziale Kontexte und Soziale Mechanismen.* S.47-66.

———. 2010　“Analytische Soziologie und Rational Choice.” in T. Kron & T. Grund（hrsg.）　*Die Analytische Soziologie in der Diskussion*.　Wiesbaden VS Verlag. S.193-204.

Opp, K-D. 1999　“Contending conceptions of the theory of rational action.”　*Journal of Theoretical Politics* 11：171-202.

———. 2013　“What is Analytical Sociology？　Strength and weakness of a new sociological research program.”　*Social Science Information* 52（3）：329-360.

———. 2013　“Rational choice thory, the logic of explanation, middle-range theories and Analytical Sociology：A reply to Gianluca Manzo and Petri Ylikoski.”　*Social Science Information* 52（3）：394-408.

拙稿 2003　「架橋仮説と社会的生産関数のヒューリステックス ―― リンデンバーグによる合理的選択理論の拡張」人間情報学研究 8：31-62.

拙稿 2013　「ドイツ語圏の合理的選択社会学者群像」人間情報学研究 18：59-78.

拙稿 1997　「フレーミングを考慮した合理的選択モデル ―― プロスペクト理論と弁別モデルの比較」（岩本健良代表科研報告書『社会構造と社会過程のフォーマライゼーション』），pp. 239-250.

拙稿 2004　リンデンバーグ「コールマンの制度設計の問題点 ―― 社会的合理性の無視？」「東北学院大学論集人間・言語・情報」136：265-288.

Hekathorn, D. 2005　“Lindenberg, Siegwart” in G. Ritzer（ed.）　*Encyclopedia of Social Theory*. vol. 1 pp. 450-452.

Lindenberg, S. 2000　“It takes both trust and lack of mistrust：The workings of cooperation and rational signaling in contractural relationships.”　*Journal of Management and Governance* 4：11-33.

———. 2001　“Social rationality versus rational egoism” in J. Turner（ed）*Handbook of Sociological Theory*. pp. 635-668.

———. 2001　“Social rationality as a unified model of man（including bounded rationality）”*Journal of Management and Governance* 5：239-251.

———. 2013　“Social rationality, self-regulation and well-being” in Wittek, R et al.（eds.）pp. 72-112.

———. forthcomming　*Theory of Social Rationality.*　Princeton Univ. Press.

Lindenberg, S./A. Diekmann 2000, 2015　“Cooperation：sociological aspects”　*International Encyclopedia of the Social & Behavioral Science.*

Wittek, R./T. Snijders/V. Nee（eds.）2013　*The Handbook of Rational Choice Social Research.* Stanford Univ. Press.

2001. 10. 19　ライプチヒ

2003. 10. 3　福岡

2005. 3. 10　グローニンゲン